平成二十二年度　入学試験問題　国　語

文・教・経・医—医　二月二十六日（金）一四・一〇—一五・五五
理（二のみ）　一四・一〇—一四・五五

注意事項

1、試験開始の合図まで、この冊子と答案紙を開いてはいけない。
2、問題冊子のページ数は十一ページである。
3、問題冊子とは別に、答案冊子中の答案紙が文学部、教育学部、経済学部と医学部医学科志望者には三枚、理学部志望者には一枚ある。
4、落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所などがあったら、ただちに申し出よ。
5、理学部志望者は、二のみを解答せよ。
6、解答にかかる前に答案紙上部の折り目をていねいに切り離し、それぞれ、所定の二箇所に受験番号を記入せよ。
7、解答は答案紙の所定の欄に記入せよ。所定の欄以外に書いた解答は無効である。
8、問題冊子の余白は草稿用に使用してもよい。
9、試験終了後、退室の許可があるまでは、退室してはいけない。
10、答案紙は持ち帰ってはいけない。問題冊子は持ち帰ってもよい。

一

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

時計は、時を計る「ものさし」である。時の「何」を計っているのだろうか。時計は、「時刻」を教えてくれるし、「時間」を教えてくれる。時刻とは、時の流れの中のある定点であり、時間とは、時の流れの中の二定点間の大きさである。ということは、「時の流れ」のある側面を計ろうとしていることになる。時の「経過」、時の「変化」、時の「動き」の計測である。

しかし時計は、時の「経過」「変化」「動き」を、どのようにして計るのだろうか。「動き」を別の「動き」によって計ろうとしている。これが、三十センチものさし(静止物)によって紐の長さ(静止物)を測る場合との、大きな違いだろう。時計は、時の「動き」を、針の「動き」によって計ろうとする。針(時針・分針・秒針)の「動き」でなくてもいい。太陽の「回転運動」によって、あるいは砂の「落下運動」によって、あるいは原子レベルの振動などの「動き」によって、時の「動き」を計ることを目指す。

ここで「ものさし」の役割をしているのは、「時の動き」ではない方の「別の動き」である。すなわち、針や太陽の「回転運動」、砂の「落下運動」、原子レベルの「振動」などが、「ものさし」である。より[a]ケンイのある時計を求めていけば、「メートル原器」ならぬ「秒原器」も見つかる。この点は、白金とイリジウムの合金や光が「原器＝ものさし」になる場合と、大きな違いはないように見える。だが、ほんとうにそうだろうか。①「時の流れ」の計測は、「物の長さ」の計測の場合と同じようなものなのだろうか。

まず、計られる側の「時の流れ」とは、どういう運動なのか。それが、ほんとうは不明である。これほど身近なものはないはずなのに(ないからこそ)、「時の流れ」がどういう運動なのかを言い当てることができない。少なくとも、「時の流れ」は、計る側の「動き」(回転運動・落下運動・振動など)とは、まったく別種の「動き」であることは間違いない。計る側の「物の動き」と計られる側の「時の動き」には、三十センチものさしによって紐の長さを測るときにはあった「測る側」と「測られる側」との「同質性」が、決定的に欠けている。よく分かる運動によって、よく分からない運動を計ろうとしている。

それだけでは[b]スまない。計る側の運動自体が、その背後に「時の流れ」を背負っている。よく分かる運動の裏面には、よく分からない運動が憑依しているのである。すなわち、計る側の運動は、先ほど「不明である」「言い当てることができない」と言っ

たばかりのその「時の流れ」を、「計る」対象とする以前から、すでに前提として使っている。よく分かる運動は、よく分からない運動を裏面に持つことによって、成立している。この点は、次のように考えてみれば分かる。

太陽の回転運動や砂の落下運動や原子レベルの振動などから、「時の動き」だけを差し引いた運動、すなわち「時の動き」をまったく含まない回転運動・落下運動・振動なんて、ありうるだろうか。想像不可能である。回転・落下・振動などの動きが生じるときには、もうそこには時が経過しているのでなければならない。

計る側の運動の裏面には、引き剥がすことのできない「時の動き」が張り付いている。「よく分からない時の動き」に裏打ちされた「よく分かる物の動き」によって、当の「よく分からない時の動き」を計ろうとする。こういうことが、生じていることになる。短絡させて言えば、「よく分からない時の動き」によって、「よく分からない時の動き」を計っているようなものである。

時計で時を計る。そこでは、②何か不気味なことが起こっている。時計の針の「動き」によって、それとは決定的に異質な動き——「時の流れ」——を計ろうとする点だけでも奇妙である。しかしさらに、その時計の針の「動き」自身が、「時の流れ」に前もって背後に回られていて、ぴったりとそれに裏打ちされている。まるで、無限にかけ離れているものへと手を伸ばして摑もうとしているのに、それは自らの背中にすでにぴったりと張り付いているかのような事態である。遠さと近さの併存、あるいは決定的な異質さと引き剥がし不可能な一体性との同居。ここに、「時計で時を計る」ことの恍惚と不安がある。

さて、「時計で時を計る」ことには、まだこの先のストーリー(仕組み)がある。それは、「時の流れ」を計ることの不気味さをうまく隠して、当たり前のことが当たり前に進行しているかのように見せるストーリー(仕組み)である。

回転・落下・振動などの運動の裏面には、必ず「時の流れ」が張り付いている。それは、表(おもて)面にはけっしてならない裏面である。目に見えるような「動き」は、表面にすぎない。では、目には見えないが感じられる「動き」ならば、裏面だろうか。たとえば、体験される心理的な推移感のようなもの。いや、それもまた別の表面にすぎない。「時の流れ」は、目に見える「動き」ではないし、感じられる「動き」でもない。それらの背後に張り付いていて、見ることも感じることもできない裏面である。どんなに裏面を顕(c)わにしようとしても、次々と新たな［A］が出現するだけである。裏面はどこまでも裏面へと退く。それに

もかかわらず(すなわち見ることも感じることもできなくとも)、必ず裏面には「時の流れ」が張り付いている。ここから、次の一歩が踏み出される。

どこまで行っても表面にはなりえない裏面は、どこまでも進んだ後のどんヅ[d]まりとしての表面(すなわち原器＝ものさしとなる運動)によって代替[e]され、そして混同される。最後まで剥がすことのできない仮面は、それこそが素顔になってしまう。「時の流れ」という裏面は、回転・落下・振動などの「運動」という表面とは、決定的に違うにもかかわらず、その中の特権的な表面によって代替され、それと混同される。こうして、究極の時計が示す運動(原器＝ものさし)が、そのまま「時の流れ」であるかのように表象されるようになる。時計の針が進むことを、時が流れることそのものであるかのようにみなしてしまう「習慣」も、この仕組み(代替と混同、あるいは仮面の素顔化)の一事例である。

また、しばしば私たちは、「直線を引く」ことによって「時の流れ」を表象する。これもまた、この仕組み(代替と混同、あるいは仮面の素顔化)の一事例である。しかも、「直線を引く」ことは、きわめて優れた代替・混同である。「直線を引く」という運動は、時計以上に簡便[f]でシンプルであり、その単純さゆえに「代替と混同」は進行しやすい。しかも、残る痕跡[g](直線)と残らない運動(引くこと)との関係が、直線を引くという運動と見えない裏面(時の流れ)との関係と類比的である。すなわち、「直線：直線を引く運動＝直線を引く運動：その運動の裏面としての時の流れ」である。この類比が、私たちをゲンワク[h]する。

「時の流れ」は、表面になりえない裏面であるがゆえに、特権的な表面によって代替されて、さらにそれと混同される。こうして、「時の流れ」は、「運動」という特権的な表面へ吸収されるようにして消え去る(裏面としてさえ、存在しなくなる)。

この仕組みが完成し定着すると、時計で時を計ることの恍惚と不安は忘れ去られ、当たり前のことが当たり前に進行しているかのようになる。「時の流れ」は、原器＝ものさしに完全に同化して、「透明な器」に変わり、ありとあらゆる運動を位置づけるためのクウキョ[i]な「座標」と化すのである。つまり、「裏面」は「裏面」であることをやめて、すべての運動を貫く普遍的な「背景」になってしまう。「裏面」の［B］的な見えなさと、「背景」の［C］的な透明さとは、ほんとうは異なるにもかかわらず、その差異自体が消されてしまう。普遍的な「背景」とは、ただの原器＝ものさしであって、そこには「時は流れない」。こうして、普遍的な「背景」が、「裏面」なき時間世界(時の流れない時間)を成立させる。

これが、「時計で時を計る」ことの、③後半のストーリー(仕組み)である。しかし、このストーリー(仕組み)には、まだ続きがある。よく分からない「裏面」は、よく分かる「背景」へと変換されて消し去られるが、消し去られたということ自体は、消えない。

「裏面」としての「時の流れ」が、「背景」としての「原器＝ものさし」に変換されるということは、「ただ過ぎゆく」というきわめて特殊な動きが、特定の量を持たない(数値なしの)基準・土台に変質したことを意味する。この基準・土台さえ首尾よく成立すれば、それを原点とする計測空間もまた同時に首尾よく開かれる。そして、いったん計測空間が開かれるならば、その内部では、計測は何の抵抗もなく[j]粛々と進行する。そこでは、時計の動きによりその他のものの動きを計ることが、すなわち時間を計ることに他ならなくなる。

しかし、消し去られてしまった「裏面」は、(それが消えることによって成立している)計測空間の［　D　］には位置づけられないものとして、無限に離れた遠くに回帰する。すなわち、「裏面」としての「時の流れ」、「ただ過ぎゆく」というきわめて特殊な動きは、計測の手が届かない外部として、戻ってくる。そして、この回帰してくる外部こそが、決定的に異質な「計られる側」であり、計ろうとしていた「よく分からない運動」なのである。たしかに、計測空間内では、「分かりやすい」位置(時刻)や量(時間)として時間は出現する。しかし、それがそもそも「何の」「何における」位置や量なのかを問おうとすると、とたんに「分かりにくく」なる。その「何」という問いが、計測空間の［　E　］(時の流れ)に触れようとするからである。

計測空間の内部では、「時の流れ」などなくとも(いや、ないからこそ)万事がうまく行っている。しかし、消し去ったつもりのその「時の流れ」が、別のところ(異質なものとしての計測対象の側)に戻って来るからこそ、その計測は、あくまでも他のものの計測ではなくて、「時間」の計測でありえているのである。「裏面」は、計測空間内部に位置を持たないまま回帰してくることによって、当の計測空間をかろうじて時間に関与させ続けている。④恍惚と不安は、原器＝ものさしが、そのような危うい計測空間の要であることの徴である。

(入不二基義『足の裏に影はあるか？　ないか？』による)

問一　傍線部a～jのカタカナは漢字に、漢字は読みをカタカナに、それぞれ改めよ。

問二　傍線部①の疑問に対する筆者の考えを八十字以内(句読点・かっこ類も字数に含める)でまとめよ。

問三　傍線部②について。どういうことが「不気味」なのか。それを説明する適切な表現を文中から十字以内(句読点・かっこ類も字数に含める)で抜き出せ。

問四　傍線部③が指示する内容について百字程度(句読点・かっこ類も字数に含める)で説明せよ。

問五　空欄A～Eに入る最も適切な語句を次の中から選び、記号で答えよ。

(イ)　表　面　　(ロ)　具　象　　(ハ)　相　対　　(ニ)　外　部　　(ホ)　類　比

(ヘ)　裏　面　　(ト)　内　部　　(チ)　絶　対　　(リ)　抽　象　　(ヌ)　相　似

問六　傍線部④について。筆者は「恍惚と不安」という言葉を用いて「時の流れ」を計測することをどのように説明しているか。百五十字程度(句読点・かっこ類も字数に含める)でまとめよ。

二

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

鳥羽院の御時、雨いと降りける夜、若殿上人あまた集まりて、古きためしの品定めもやありけむ、「誰か優に文書く女、知りたり」と言ひあらそひ出でて、「今夜、こときらむ。文やりて、返り事、かたみに見て、劣り勝り定めむ」など言ふほどに、子一つばかりにもなりぬ。人々、宿直所へ、硯、紙召しにつかはすとて、随身どもを走らかさせ給ひけり。

その時、中院大臣は中将にて、かたがた思ひめぐらし給ふ。花園内大臣家の督殿こそあらめ、忘れて久しくなりにし人を思ひ出で給ひて、いみじき言の葉尽くし書き給へり。紫の七重薄様に書きて、同じ色に包まれたりける。夜目に暗くやありけむ、雅兼朝臣は、大殿のもたれはといふがりやる。白き薄様とかや。

かやうにあまた書きてやる。さながら持ていぬ。おのおの興あるあらそひのうちにも、よくもがなと心を尽くせる気色、をかしかりけるに、とばかりありて、返り事どもありけるに、このもたれはが返り事、なかに優れたりけり。花園の督殿はさりともと、頼もしく思はれたりけるに、こよなう書き劣りて、やすからず思されけり。

後に人の言ひけるは、「花園の北の方は優なる人にて、さるべきをりをりの歌の返し、優なる文の返り事などをば、見入れて教へ給へりければ、督殿、男、かれがれになる時は、この上をせめ聞こえけるに、その夜しも、上おはせざりけり。絶えて久しくなりたる人、にはかにおとづれたるに、心も心ならで、あわてて書きて、名折りたる」とぞ言ひける。

これも心のすべなきによりてなり。遙かになりなむ人の、にはかに言ひ出でたらむにつけても、心をしづめて、いかなるやうのあるにやと案ずべし。そのうへ、例の人おはせずは、いよいよ、その夜、返り事なからむは、まさりぬべし。これは思ひはかりなきかたを言はむとてなり。すべて文はいつも褻なるまじきなり。あやしく見苦しきことなども書きたる文の、思ひかけぬ反故の中より出でたるにも、見ぬ世の人の心際は見ゆるものぞかし。ただいまさしあたりて、はづかしからぬ人と思へども、落ち散りぬれば、必ずあいなきこともあれば、よく心得べきことなり。

かの北の方とかやは、春宮大夫公実卿の女、待賢門院の御妹なり。女院につき参らせて、鳥羽院へも時々参り給ひけるが、花園に入り籠もり給ひける後、かの家に菊の花の咲きたりけるを、院より召しければ、参らせらるるとて、枝に結びつけられたりける、

九重にうつろひぬとも菊の花もとの籬を思ひ忘るな

とありけるをば、ことに心おはするさまにぞ、このゆゑを知れる人は申しける。

かの貫之が娘の宿に、匂ひことなる紅梅のありけるを、内裏より召しけるに、鶯の巣をつくりたりけるを、さながら奉るとて、

勅なればいともかしこし鶯の宿はと問はばいかがこたへむ

といふ歌をつけたりける故事、思ひ出でられて、かたがたいとやさし。

（『十訓抄』による。一部文章を改めた箇所がある。）

【注】

○鳥羽院…第七四代天皇。在位は一一〇七～二三年。
○古きためしの品定め…『源氏物語』帚木巻の「雨夜の品定め（理想の女性についての論評）」のこと。
○花園内大臣家…「花園」は地名。この内大臣が住み、多くの草花を栽培したという。
○督殿…女房の名。
○薄様…薄手の紙。
○もたれは…女房の名。
○藝なる…「藝」は、ふだん、日常的の意。
○待賢門院…鳥羽天皇の后。次の「女院」も同一人物をさす。

問一　傍線部A、B、Cを、言葉を補ってわかりやすく口語訳せよ。

問二　二重傍線部「こよなう書き劣りて」とあるが、なぜそうなったのか。その理由を具体的に説明せよ。

問三　波線部は筆者の感想である。なぜ「故事」が思い出され、「かたがたいとやさし」と感じられたのか。文中の和歌に即して説明せよ。

三

次の文章は、江戸時代の批評家、菊池五山が著した、詩に関する随筆の一部である。この文章を読んで、後の問に答えよ。但し設問の関係で送り仮名を省いた部分がある。

詩a雖レ嫌二陳腐一、亦無下妄自捏造字面之上理。韓文・杜詩無三一字没二来歴一。古人鄭重、1乃如レ此。後生妄以二己意一種種製作。所謂愚而好二自用一者。b偶有三人問二来処一、亦自知二其非一、2乃詭曰、出二某集一。吾誰欺。欺レ天乎。且所謂新変者、一換意思極令二斬新一之謂。其勝レ人処、3不二必在レ用二生字一也。4猶下之善治レ庖人、其料不レ過二尋常魚肉一、一経二調剤一便作中珍羞殊品上。今之詩流烹レ蛇享レ客者多矣。詩用二生字一者、六如之癖也。其人淹博該通、雖レ不レ無二鑿拠一、然亦古人所レ無。古人以レ意勝、不二以レ字勝一。六如則挟レ字闘レ勝。僅可三以

悦ニ中人ヲ而不レ可ニ以牢ニ籠上智ヲ也。蓋渠一生読レ詩如下閲ニ灯市ヲ一覓中奇物上ヲ。故ニ其ノ所レ著ス詩話ハ、只算ダカゾフルノミニテ一部ノ骨董簿ボニ、殊ニ失フ詩話之体ヲ也。

（『五山堂詩話』による）

【語注】
○韓文＝韓愈の文章。　○杜詩＝杜甫の詩。
○来歴、来処＝ことばの由来。
○某集＝（ことばの出典となる）某人物の詩文集。
○生字＝見慣れない奇抜な文字。　○善治レ庖人＝料理の達人。
○料＝食材。　○調剤＝調味料で味を整えること。
○珍羞殊品＝おいしくすばらしい料理。　○享＝もてなす。
○六如＝江戸時代中期の僧侶・詩人。『葛原詩話』などがある。
○淹博該通＝広くものごとに通暁していること。　○鑿拠＝難しい出典。
○挾レ字鬪レ勝＝ことさら難しい字を詩中に用いることで詩の優劣を競うこと。
○中人＝普通の人。　○上智＝優れた人。　○渠＝三人称代名詞。
○灯市＝灯籠を飾った縁日に出る露天の店。
○詩話＝詩に関する随筆。　○骨董簿＝骨董品の帳簿。

問一　波線部a「雖」b「偶」c「殊」の読みを、それぞれひらがなで記せ。

問二　傍線部1「古人鄭重、乃如レ此」を、「此」の内容を明らかにして現代語訳せよ。

問三　傍線部2「其非」とは具体的にどのようなことか、説明せよ。

問四　傍線部3「不二必在レ用二生字一也」を書き下し文にせよ。

問五　傍線部4「猶下之善治レ庖人、其料不レ過二尋常魚肉一、一経二調剤一便作中珍羞殊品上」とは何をたとえて言っているのか、説明せよ。

問六　傍線部5「蓋渠一生読レ詩如下閲二灯市一覓中奇物上」を現代語訳せよ。

問七　本文全体の論旨をふまえ、筆者の主張を百五十字以内で述べよ。